

1月18日(月)

タイムアウト

聖書朗読 ホセア 8章

神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって・・・

II テモテ 1 : 9

旧約聖書の時代、神様は預言者たちをお遣わしになり、神の民をしばしば戒められました。「人々を戒める」という預言者に与えられた任務は、並々ならぬ大変さが伴ったことでしょう。神様が旧約時代の人々を戒められたことは、私たちが子供たちを躾けるために罰を与えることと似ています。子供が悪いことをした際、自分の部屋でしばらく反省するよう言いつけたりしますが、欧米ではこうしたしつけの方法を「タイムアウト」と呼んでいます。神様がその民を戒められたのも、この「タイムアウト」と似ているように思います。躾けは必要なことですが、楽しいことではありません。私たちが子育てをしていた時、子供たちが「タイムアウト」に感謝したことは殆どなかったと思います。しかし、それは子供たちにとって必要なことでした。

第二テモテの3章16節17節で、パウロはテモテに対して次のように言っています。御言葉は「戒め、矯正、整えられた者」になるために大切である、と。私たちが聖書を読んでいて、霊的に整えられたと感じた時はありませんか。御言葉は私たちを守って下さり、正しい方向へと導くのです。

聖書が示している真理は、私たちにとっていつでも恵みです。しかし、不完全な私たちがそれを祝福であると理解するには時間がかかる時もあるでしょう。神様の恵みにより、私たちには救いが与えられています。そして、救いを頂いた私たちがどのように歩んでいったらよいか、聖書は次のように教えています。「不謹慎とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活」することです(テトス2:11、12)。

御言葉に耳を傾け、自らの行いを顧みると、あの有名な讃美歌「アメイジング・グレイス(われをもすくいし)」の一節が身に沁みます——*恐れを信仰に変えたまいしわが主のめぐみ げにとうとし*。人生において私たちが神様から頂く恵みは、時に痛みを伴う恵みである場合もあります。しかし、神様からの恵みは、私たちが真に必要なとしている霊的な糧となり、私たちにとって最善のものなのです。

讃美歌 II 編 167

祈り 聖なるお父様、あなたの栄光を見せて下さい。そして、御心に御従い出来るようお導き下さい。イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

ボブ・メイズ
テキサス州ラボック

今日の日

2020年1月18日～1月24日

翻訳 伊藤若菜

編集 相川忠義

この冊子の聖句は、新改訳聖書第三版を使用しています。

御茶の水キリストの教会

1月19日(火)

離れ 離れ

聖書朗読 マタイ 27:27~31、45~46

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。 イザヤ 59:2

里親が女子少年院を訪ねて来た時、少女は泣きました。彼女は、里親を愛していましたし、里親から自分が愛されていることも知っていたからです。ある過ちを犯した結果、女子少年院に送られ、大好きな里親とも離れ離れになってしまいました。少女の自由は無くなり、人々との繋がりも絶たれてしまいました。自分ではどうすることもできない孤独感を女子少年院で味わうことになったのです。

アダムとエバはどうだったのでしょうか？ 神様に背いた後、彼らは罪悪感を抱いたことでしょう。神様がエデンの園に来られた時、彼らの心は痛んだと思います。罪は、神様と私たちとの間に壁を作り、神様と私たちとを隔ててしまいます。そしてそのような状況になると、神様の心は痛みます。そして私たちの心も痛むのです。「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」（創世記5:5、6）。

「三時ごろ、イエスは大声で『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と叫ばれた。これは「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」（マタイ 27:46）。イエス様が、人類の全ての罪を負われたとき、神様はご自身をその御子イエス様から引き離されました。この引き離されたことによる苦しみは、イエス様が受けた肉体的苦痛よりもさらに辛い出来事だったのではないのでしょうか。しかし、イエス様が払って下さったこの大いなる犠牲を通して、私たちが失ってしまった真の自由と神様との関係（交わり）を回復して頂いたのです。

讃美歌 515

祈り お父様、罪を犯す度に心を痛めています。常に御心に従えるよう、お導き下さい。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

キャロル・ローズ
コロラド州プエブロ

1月20日(水)

信仰の基盤

聖書朗読 マタイ 28:1~7

そして、もしキリストがよみがえられなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいます。Iコリント 15:17

「過去を変えられたらいいのに！」と思ったことはありませんか？ 「もし過去を変えられるならば、もっと良い計画を立ててよい結果を出せるのに！」と誰でも思うものです。しかし、過去を変える力など、私たちは持っていません。それが現実です。そしてこのような現実だけを見ますと、私たちは落胆し、希望を失い、お先真っ暗のように感じてしまいます。

しかしながら、神様にとっては、どんなに「難しそう」に見えることであっても「不可能」ということは決してありません。そして私たちの信仰は、人間の能力に頼り頼むものではなく、神の御力（みちから）に頼り頼むものなのです。私たちには、出来ることに限界があります。また、私たちの知性にも限界があります。しかし、神様はイエス・キリストの復活という出来事を通して、次のことを明確にされたのです——すなわち、主イエスへの信仰は真理への道であり、イエスを通してこそ私たちは義とされ、主イエスへの信仰を通して私たちの歩みの原動力が与えられる、ということです。

イエス様の復活により、私たちは恐れる必要がなく、むしろ喜びに満たされています。復活という確かな出来事により、私たちは、イエス様が「死の力」に打ち勝ったお方であることを知っています。復活を通してもたらされた希望により、私たちは（イエス様が私たちの犠牲となって下さり、永遠の命を与えて下さるという）福音を伝えるのです。私たちは、イエス様が約束して下さったことは全て成し遂げられると信じます。こうした主イエスを通してもたらされた良き知らせこそが、私たちがクリスチャンの生きる原動力となるのです。

主イエスの墓石（墓の入口の扉のような役割を果たしていた石）は取り除かれましたが、それはイエス様を墓からお出になるためだけでなく、私たちが復活のイエス様と出会うことが出来るためでもあったのです。

讃美歌 148

祈り 親愛なる神様、御名を讃美します。あなたの一人子であるイエス様を私たちのために与えて下さったことを感謝します。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

ランディ・ロバーツ
ニューメキシコ州グランツ

1月21日 (木)

主イエスはどなたですか？

聖書朗読 マルコ 4：35～41

主があらしを静めると、波はないだ。

詩編 107：29

夕方、イエス様は弟子たちと共にガラリヤ湖を渡るために舟に乗っていました。激しい突風が起こり、(舟が転覆して死んでしまうのではないかと) 弟子たちは怯えました。そして、マルコは次のように記録します。「ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。『先生。わたしたちがおぼれて死にそうでも、なんとも思われないのですか。』イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に、『黙れ、静まれ。』と言われた。すると風はやみ、大なぎになった」(38、39節)。「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう』」(41節)。

私たちも、自分自身に同じ問いかけをする必要があります。「風と波が従うこの方はどなたなのか？」と。それに対する答えを指し示している聖句を挙げたいと思います。「あなたは、海のとどろき、その大波のとどろき、また国々の民の騒ぎを静められます」(詩編65:7)。「あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます」(89:9)。「主があらしを静めると、波はないだ(107:29)。

弟子たちはイエス様がどのようなお方なのか、まだよく理解できず戸惑っていました。時に私たちも、弟子たち同様、神様のなさる不思議な御業に圧倒されて、ただただ戸惑ってしまうことがあるかもしれません。イエス様は、単に嵐を治める等の「奇跡をなさる方」なのではなく、人の形をとって(つまり受肉して)この世界に来て下さった神なのです。そしてイエス様は、私たちを助けて下さるためにいつでも私たちと共に居て下さるのです。

聖歌 472

祈り 天に居られるお父様、人生における嵐のような経験をする際にも、あなたがいいつも共に居て守っていて下さることを思い起こさせて下さい。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

キャサリン・クナウフ
オレゴン州セーレム

1月22日 (金)

宣教旅行は身軽に

聖書朗読 マルコ 6：7～13

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。 マタイ 6：33

宣教旅行には、大切な要素が2つあります——「旅の準備」と「旅行後の評価」です。イエス様は、12人の弟子たちに癒しを行う力をお与えになり、福音を宣べ伝える使命と共に彼らを送り出しました。以前から弟子たちは、イエス様による奇蹟や説教を見聞きしていました。そして、今や、彼らがそれぞれ宣教の旅に遣わされる時が来たのです。彼らの「旅の準備」は、持ち物を必要最低限にとどめ、そして完全に神様に拠り頼むことでした。後の「旅行後の評価」としては、彼らの宣教の旅は、豊かに祝福されたと言えます。彼らは、大勢の人々に福音を宣べ伝え、また多くの癒しの業も行いました。神様は、弟子たちの必要を豊かに満たして下さいました。

以前、私の息子は、他の7名の子たちと共にユースグループの宣教旅行に参加しました。その宣教旅行は「ミステリーツアー」ともいえるような旅行でした。旅行前の準備の際に告げられたことは、「食べ物、お金、電子機器は持ってこないように」でした。各々、紙袋1つに収まる着替え、歯ブラシ、石鹸のみ持参することになっていました。皆で車に乗り、共に祈り、行先を選びました。ガソリン代の支払いのためにクレジットカード1枚が支給され、北へと向かいました。ホテルなどの予約はせず、宿泊費の予算も組まれてはいませんでした。しかし、彼らの必要は、すべて神様が満たして下さいました。訪ねた先々で、彼らは奉仕をし、礼拝に人々を招きました。彼らは神様に全幅の信頼を置き、奉仕に励みました。そして、旅先での彼らの必要は、いつも満たされていたのです。彼らは空腹になることもありませんでした。というのも、旅先のクリスチャンたちが、持ち寄り食事会の残りを箱詰めするなどして、彼らに沢山の差し入れをしてくれたからです。この宣教旅行を通して、彼らの信仰はより深まり、成長しました。彼らの旅もまた、実り多き旅だったと言えるでしょう。

私たちも、周りの人々に対して福音を分かち合うという使命が与えられていますが、大切なことは、(自分一人で頑張り過ぎてしまうのではなく)神様に拠り頼む信仰です。福音を分かち合う上で「重装備」(たくさんの過剰な準備)は必要ありません。真に必要なものは、神様が豊かに備えて下さるからです。

讃美歌 502

祈り お父様、人生という旅路において、あなたに拠り頼み、福音を宣べ伝えられるようお導き下さい。いつも必要を備えて下さることに感謝します。

イエス様の御名を通してお祈り致します。アーメン。

サリー・ジェーン・シャンク
オクラホマ州エドモンド

1月23日(土)

主イエスに学び続ける

聖書朗読 マルコ 8:1~21

主よ。あなたの道を私に教えて下さい。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心一つにしてください。御名を恐れるように。 詩編 86:11

本日の聖書朗読箇所、イエス様は、周りの人々が「悟らない」ことに、非常にがっかりしていたに違いありません。このほんの少し前には、「主が、僅かなパンと魚を用いて大勢の人々の空腹を満たす」という奇蹟を2度もなさっていました。驚くべき奇蹟が2つも行われたというのに、パリサイ人は、依然として悟らず、イエス様に議論をしかけました。彼らは「(天からの) しるし」を求めたのです。マルコは、こう記録します。「イエスは、心の中で深く嘆息して、こう言われた。『なぜ、今の時代はしるしを求めるのか。まことに、あなたがたに告げます。今の時代には、しるしは絶対にあたえられません』(マルコ8:12)。この時イエス様は、「ああ、悟らない人たち・・・」と悲しく思われたに違いありません。

その後、15節で主は「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい」と弟子たちに言われました。しかし、その意味も、弟子たちは理解しませんでした。弟子たちは、主が言われたことがパンの不足と何か関係があると思ひこみました。大勢の人々の空腹を満たすという奇蹟を目撃したばかりの弟子たちでしたが、パンの不足を引き続き心配していたのです。「イエスは言われた。『まだ悟らないのですか』(21節)。

私は、パリサイ人たちや弟子たちのように「悟らない」人ではありたくない、と思っています。しかし、パリサイ人や弟子たちの気持ちもよく分かります。私も、人生において神様が働いて下さっていることに気付かないことがしばしばあるからです。私が神様の臨在に気付かないということは、神様にとって悲しいことではないかと思ひます。しかし、このような私に対しても忍耐強く居て下さる神様に、感謝します。

讃美歌 II 編 173

祈り 親愛なる神様、いつも忍耐をもって私たちを教えて導いて下さり、感謝します。あなたから学び続けられるよう、お導き下さい。
イエス様の御名を通して祈り致します。アーメン。

ジョッシュ・ボイド
インディアナ州ラファイエット

1月24日(日)

主の声に聴く

聖書朗読 マルコ 9:1~13

すると雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい。」と言う声が出た。 ルカ 9:35

私たちが真に耳を傾けるべき声は、誰からの声でしょうか？ 私たちは、あらゆる音や声に囲まれて生活しています——様々な音楽ジャンル、スポーツ・キャスター、ニュース・アンカー、セールス担当者、宗教家、ベストセラー作家、雑誌等が発信する様々な音や声です。

1世紀の時代においても、様々な声(主義・思想)が発せられていました——アテネの哲学者たち、ローマ皇帝や帝国の高官たち、その他当時影響力のあった人物たちの様々な主義・主張です。聖書の舞台となったパレスチナでは、モーセ、エリヤ、エレミヤ、ヒレル、ガマリエル、ユダ・マカバイオス、バプテスマのヨハネといった人物たちの声、影響力を持っていました。

3人の弟子たちとイエス様は、高い山に登られました、それは恐らく雪を被ったヘルモン山です。そして弟子たちは、主がモーセやエリヤと話されているのを聞きました。モーセとエリヤは旧約時代の人々で、当時生きていた人たちではありません。やがて、モーセとエリヤは姿を消し、イエス様だけが残られました。3人の弟子たちが聴くべき声はイエス様の声だけとなったのです。「このとき雲がわき起ってその人々をおおい、雲の中から、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい。』と言う声が出た(7節)。神様は、「イエス様に耳を傾けよ」と言われたのです。ヘブル人への手紙の著者は、次のように書き記しています。「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました(ヘブル1:1-2)。私たちは、イエス様の声こそ、しっかりと耳を傾けましょう！

讃美歌 187

祈り 神様、私たちの心の中には、様々な心の声(思い)があります。しかし、神の御子・イエス様の声に耳を傾けられるよう、お導き下さい。
イエス様の御名を通して祈り致します。アーメン。

トム・オルブライト
ニューハンプシャー州エクサター